

氏名	張 立			
ヨミガナ	チョウ リツ			
学位の種類	博士（文化財）			
学位記番号	博美第686号			
学位授与年月日	令和4年3月25日			
学位論文等題目	（論文）建窯における「鷓鴣斑」の研究 — 福建博物院所蔵《黒釉鷓鴣斑蓋片「供御」在銘》の想定復元模造を通して — （作品）福建博物院所蔵《黒釉鷓鴣斑蓋片「供御」在銘》の想定復元模造			
論文等審査委員				
（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	北野 珠子
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	片山 まび
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	三上 亮
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	椎名 勇

（論文内容の要旨）

本研究対象の《黒釉鷓鴣斑蓋片「供御」在銘》（以下、鷓鴣斑蓋片）は中国・福建省に位置する建窯で焼かれた黒釉蓋片である。建窯は宋時代に黒釉を施釉した碗（宋時代には盞と称す）が盛んに生産された。宋時代の文献資料において、建窯黒釉盞には「鷓鴣斑」と分類される1種類の黒釉盞があることが記されている。1950年代以来の発掘調査と伝世品の研究により、黒釉盞の分類はある程度の定立をみているが、本論の主題である「鷓鴣斑」については、宋時代に具体的にどのような黒釉盞を指したのか諸説あり、十分に解明されていない。ただし鷓鴣斑蓋片を発掘した考古学者、曾凡はその見込には円形の白い斑文が配されていることから宋時代の「鷓鴣斑」である可能性を提起している。また、1990年代に陳顕求を中心とした研究チームは鷓鴣斑蓋片の復元研究を行った。しかし、その研究における制作工程についての詳しい記述がなされておらず、鷓鴣斑蓋片の制作技法は未だ明らかになっていない。以上の研究史を踏まえた本論の目的は、次の二つである。第一に、文献資料の整理を通して宋時代に「鷓鴣斑」がどのような黒釉盞を指したのかを探る。第二に、先行研究の課題を踏まえて鷓鴣斑蓋片の想定復元模造を制作することで、焼成方法や装飾技法を明らかにする。

本論は3章からなる。まず第I章では、建窯の研究史と用語にまつわる文献記録をまとめ、復元の先行研究における課題について論じた。まず「鷓鴣斑」についての研究史、名称の定義について文献記録から探った。その実態については、未だ不明のところが多いが、詩文についての新たな分析により、当時の人々が「鷓鴣」と考えた中華鷓鴣は、「鷓鴣斑」と同じような白い大きな斑点が胸元にあり、何らかの関係があることがうかがわれた。つぎに復元に関する先行研究を取り上げ、化学分析値にもとづいた復元、工程の詳細、器形や文様の復元などが課題として残されていることを確認し、復元研究の方向性を示した。第II章では、鷓鴣斑蓋片についての実見報告と、そのほか関連資料についての詳細を記した。鷓鴣斑蓋片の観察による推測では、破断面の素地色が黒いことから、鷓鴣斑蓋片は鉄分を含んだ赤土で作られ、還元焼成で焼かれたことが推察された。また、高台周りにある釉溜まりの垂れ具合をみると、高い焼成温度や長い時間の焼成がされたと推測できたが、鷓鴣斑蓋片の円形の白い白斑は黒釉の柔らかな釉調に比べて硬い印象があり、同じ焼成温度で焼かれたとは考えにくかった。黒釉の上に釉薬をつけ、高温焼成すると、黒釉に含まれる鉄分が分解し生成された気泡でつけた釉に痕跡を残してしまい、黒い斑点のように見えてしまう。また、つけた白斑の輪郭ははっきりとせず、黒釉に馴染み広がっていくはずである。以上の点から白斑の特殊性に着目した。

現在確認できる書類・文献・資料の中では、鷓鴣斑蓋片のような建窯の作例はきわめて少ない。しかし、筆者が現地で調査した際に、個人の収蔵品のなかに本作品と類似する幾つかの建窯陶片を確認できた。出

土品と採集片の調査から、鷓鴣斑には従来、考えられていたよりも多様な作例があることが明らかとなった。

第Ⅲ章では、熟覧調査・寸法測定・文献調査による資料に基づいて、想定復元模造を行った。特に鷓鴣斑蓋片の制作工程を想定し、その白斑の加飾技法を明らかにすることを目的とした。想定復元模造の素地、黒釉、白釉は鷓鴣斑蓋片の化学分析値をもとにして、日本の原料で調合した。想定復元模造に適する焼成方法を探るため、焼成試験を繰り返し行う中で1200℃から還元する、適した焼成方法(本論では天目還元焼成と呼ぶ)を明らかにし、鷓鴣斑蓋片の素地色に近い色を得られた。想定復元模造に調合した黒釉は、還元焼成で鷓鴣斑蓋片に近い黒色を得た。また、最も重要な新知見として、鷓鴣斑蓋片の白斑を得るためには、2次焼成が行われた可能性を指摘した。全体を通した焼成試験からは、適正温度は1次焼成が1280℃前後、2次焼成が1200℃-1250℃であった。欠損部分についてはスッポン口と端反り口の2種類の可能性を考え、点描の再現を行った。

以上、本研究の成果については以下のようにまとめることができる。

第一に、宋時代の文献資料整理を通して、宋時代に「鷓鴣斑」は必ずしも黒地に白い円形の斑点が付いている文様を表すわけではないことが明らかになった。斑点に近い細かな斑文様や地と文様にコントラストがあるものを表す時にも「鷓鴣斑」をその例えとして用いていることが判明した。

第二に、復元制作による新知見として、鷓鴣斑蓋片の白斑の装飾には2次焼成が行われた可能性を示した。宋時代には2次焼成による金彩の加飾がなされるなど、その背景には様々な要因があったと推察されるが、今後の課題としたい。

以上、鷓鴣斑蓋片の復元制作を通し、その焼成方法と装飾技法の特殊性を確認することができた。

(論文審査結果の要旨)

申請者は、油滴天目の復元制作において既に成果を得ていたが、本研究ではあえて《黒釉鷓鴣斑蓋片「供御」在銘》(以下、鷓鴣斑蓋片)の復元に挑んだ。この「鷓鴣斑」という名称は史料の上ではいち早く南宋代に登場するとともにその正体は長らく忘れられたままにあった。1950年代以後、建窯の発掘調査が進む中で、1cmほどの大きな白斑がほどこされた破片が発見され、今日、本片こそは「鷓鴣斑」であろうとされている。しかし破片であるだけに、その器形や文様、さらには焼成技法についてはいまだ謎が多く残されている。

第Ⅰ章は、鷓鴣斑についての定義を主たる論点とする。申請者によると、「鷓鴣斑」と一口に言っても陶磁器、硯石など様々な器物装飾の形容に用いられ、一定の様を指す用語ではないという。しかし鷓鴣斑蓋片の白斑は中華鷓鴣の胸元の模様に通じ、何らかの関係性を示すとす。その妥当性はともかく、用語について原点に立ち戻って申請者なりの分析を加えた点について評価したい。ただし史料の羅列に終始したところがあり、今少しの考察が望まれるところである。

第Ⅱ章は、福建省博物院所蔵の陶片のみならず、個人蔵の鷓鴣斑蓋片についての知見を紹介し、鷓鴣斑蓋には黒釉の上で白斑が浮き上がって見えるもの、沈んでみえるもの等、いくつかの種類があることを指摘している。個人蔵の鷓鴣斑蓋片については初めて公開される資料であり、今後、当該研究に資するところは大きい。

第Ⅲ章では、復元制作の過程を記すが、黒釉の上に浮き上がる白斑が2次焼成に起因するという、宋代陶磁史研究の上ではきわめて貴重な見解を披露している。あわせて器形と文様全体の復元も綿密な考察がなされ、ある一定の成果を見たと言えよう。惜しむらくは、白斑の表現や禾目など復元に至らなかった部分についての言及を欠いており、それぞれのデータについてもより丹念な分析と記述が求められるところである。

全体としては、それぞれの事項に関する掘り下げがやや不足しているものの、筆者なりの考察や新知見が随所に見られ、今後の宋磁研究に資するところが大きいと判断される。以上、審査員の同意のもと博士学位に相当するものとして意見の一致をみた。

(作品審査結果の要旨)

申請者は中国南宋時代の陶片から当時の完品を想定復元するという大変困難と思われる制作を行った。想定復元模造を制作するとは陶の素材である土と釉薬の選定、焼成方法、表現や意味を含む文様、さらに欠損部分の形を想定するという多義にわたる研究が求められる。すでに失われた部分を想定し提示することに関しては、研究者であり陶芸制作者でもあることを考慮した上で、今回提出の「想定復元模造」を、表現を含むものとして取り扱うこととした。申請者はすでに曜変天目の釉薬の再現的研究を行い制作者としての作品発表も行なっている経緯があり、材料は現在入手できるものを化学分析値とゼーゲル式により試験を重ね、焼成方法は現在、中国建窯で建盞を制作する際の焼成方法を参考に申請者が決めた昇温方法で電気炉を使い、不確定要素を絞っての研究としている。

申請者は《黒釉鷓鴣斑盞片「供御」在銘》の制作工程を下地となる全体の黒釉焼成、さらに内面に斑文を施してからの焼成という本焼成二回によるものとして復元を試みた。数他の黒釉鷓鴣斑の陶片をも検討して、再現試験を重ね導き出された復元方法であるが、この種の盞片の焼成として説得力に乏しい点があり全体の制作工程を一回焼成の可能性を含めての詳細な検討が必要と思われる。さらにこの復元制作では二回焼成を前提に内面の斑文が筆により丁寧に施されている。模作を制作するという意図から成形や文様いずれも形をなぞることに終始しているように見受けられる。実際に陶芸制作におけるプロセスは身体性を伴うもので流れ作業により生まれるリズムや抑揚など密接に製品の仕上がりに影響する。遺物から何をどこまで読み取れるのか、そして復元させることは真の意味で技量を問われるところである。欠損部分の轆轤による成形については中国宋時代の建盞の中から口縁部の轆轤挽きの2種の系統を導き出し想定している点は妥当な判断として見る。提出された復元想定模造の盞は印象的にはやや繊細ではあるが相応の品格を備えており、想定復元模造としてみて、博士学位の提出作品として認めるものである。

(総合審査結果の要旨)

本研究の特徴は、素地や釉薬の化学分析は行われたものの、技法研究は十分に尽くされてはいない《黒釉鷓鴣斑盞片「供御」在銘》(以下、鷓鴣斑盞片)の製作方法について、

- ・ 文献を中心に、宋代中国で「鷓鴣斑」とされた装飾文様を、名称の由来である鷓鴣の特定から始めて、当時の人々が共有していた視覚的特徴の定義を試みたⅠ章の2節
- ・ 公表された化学組成を軸に、自身の制作経験を活かしながら素地や釉薬の調合から施釉や焼成の方法までを実証的、且つ具体的に解明したⅢ章にある。

宋代の茶器嗜好変化に応じて鑑賞性豊かで多種多様な黒釉を開発した建窯は茶碗の一大製造地として高い評価を得た一方、その様々な釉調が後世に名称に対する見解の相違をもたらす結果を生んだ。「鷓鴣斑」もその一例で、建窯製品に「鷓鴣斑」で彩られた茶碗が存在したことは文献上確認されながら、それがどのような装飾文様であったかの検証は戦後の考古学的調査で本格化した。なかでも1988年に発掘された、本研究対象の鷓鴣斑盞片は、「鷓鴣斑」という装飾文様の実態を伝えるものとされたが、多くを欠く破片状態で発掘され、単独で「鷓鴣斑」茶碗の全容を把握出来るとは言い切れない。そこで張立氏は「鷓鴣斑」を、建窯製品の一装飾文様として考察する従来の方法から、鷓鴣という鳥そのものを捉え直す方法に換えて、当時の人々が共有していた視覚的イメージの明確化をはかり、加えて、それが形容する対象を同時代の工芸製品一般へと広げて用語の定義を可能にした。そして、定義を満たす材料と技法を導くことを経て、想定復元という成果を得た。

Ⅱ章2節で紹介する、表裏に「鷓鴣斑」を持つ盞片の存在に対する自身の解釈、終章2節で自ら認める復元対象作品の硬い釉調と釉溜まりの不在など、提案する製作技法が鷓鴣斑盞片の全てを解決しているわけ

ではなく、再考や改良の余地は課題として残る。しかし、残された蓋片の情報に向き合い、実証を重ね、想定復元模造としてひとつの具体的な作品にまとめ上げた点は評価したい。

以上、本研究の作品と論文について、審査員全員の同意を持って博士研究に値するものと認めるに至った。